

ルカによる福音書 「イエスの祈りに触れる」

司祭 ヨハネ 井田 泉

新約聖書 27 卷の中で、イエス・キリストの生涯を伝えてくれているのは、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書ですが、今日はその三つ目「ルカによる福音書」です。

「ルカによる福音書」はマルコ福音書を元にしつつ、ルカ独自の資料を加えて書かれたと言われています。その点はマタイ福音書と同じです。しかしマタイ福音書がイスラエルの伝統を強く意識して書かれているのに対して、ルカ福音書は目標を広く世界に置いています。いずれにもイエスの系図が出て来ますが、マタイの場合は信仰の父と呼ばれるアブラハムから始まる（マタイ 1:1-2）のに対して、ルカでは人類の始祖アダムにさかのぼります（ルカ 3:38）。なおルカ福音書と使徒言行録の著者は同一人物で、いずれもテオフィロという人に献呈された、という形をとっています。ルカ福音書が第1部、使徒言行録が第2部ということになります。

一般の方々に広く親しまれている聖書の物語というと、クリスマス——イエスの降誕物語だと思いますが、博士の話は別として、マリアへのお告げ、羊飼いへの知らせなど、主なものはこのルカ福音書に記されています。

1. ルカ福音書を囲む祈り——民衆の祈り・弟子たちの祈り

今日はこのルカ福音書を「イエスの祈り」に焦点を当てながらたどってみたいのですが、最近ふと気づいたのは、イエスの誕生の出来事より前、ルカ福音書の初めに民衆が祈っている姿がある、ということです。

「1:10（ザカリアが）香をたいている間、大勢の民衆が皆外で祈っていた。」

これは祭司ザカリアが神殿の奥（「主の聖所」）で香をたいて祈っている間、外でザカリアを待っている人たちの姿です。この時ザカリアは、天使から、もう諦めていた子どもが与えられることを告げられるのですが、やがてその子ヨハネが成長して、後にイエスに洗礼を授けることとなります。

今、ルカ福音書の最初のほうに描かれた民衆の祈りを見たのですが、それではルカ福音書の最後はどうでしょうか。

「24:52 彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、53 絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。」

「彼ら」というのはイエスの弟子たちです。ほめたたえる＝賛美も祈りのひとつのあり方です。そうするとルカ福音書全体は、初めは民衆の祈り、終わりは弟子たちの祈りで囲まれている、ということになります。

他の福音書に比べて、ルカ福音書にはイエスが祈っておられる姿が目につきます。試しに新共同訳聖書で「祈る」「祈り」という言葉が出てくる回数を数えてみると、マタイが 19 回、マ

ルコ 17 回、ルカ 28 回、ヨハネ 2 回、使徒言行録 34 回で、やはりルカが多い。もっともこれは日本語新共同訳の単語を数えたに過ぎず、「祈る」「祈り」という言葉を使っていなくても祈っている場合は多いので、ごくおおまかな話ではあります。

それはそれとして、ルカ福音書におけるイエスの祈りに近づいてみたい、イエスの祈りに触れてみたい、というのが、今日のお話の焦点です。

2. イエスの洗礼と祈り

ルカ福音書の中でイエスが祈っている最初の場面は、洗礼の場面です。イエスが洗礼者ヨハネから受けた洗礼は、ヨルダン川の水の中に全身を浸す洗礼です。ここには古い自分が溺れて死に、神さまと深く結ばれた新しいわたしが生き始める、という意味があります。

「3:21 民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天がひらけ、22 聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上にくだって来た。すると、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』という声が、天から聞こえた。」

同じ洗礼の場面はマタイ福音書にもマルコ福音書にもあるのですが、ルカにだけ「祈っておられると」と記されているのが注目されます。「祈る」というのは自分の中でつぶやいたり黙想したりすることではなく、神に呼びかけ、神に語りかける行為です。人間の側から神に対して積極的に関わる行為です。

「イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、22 聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。」

イエスの祈り、イエスの神に対する働きかけに答えるかのごとくに、天が開け、聖霊が降って来る。キリスト教においては、神と人の関わり、相互の交流がとても大切ですが、そのことを特にルカ福音書のイエスの洗礼記事は示しているようです。

もうひとつのルカの洗礼記事の特徴は、「民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて」と書かれていることです。民衆とイエスのつながり、連帯をルカは意識して読者に示しています。

その後、イエスは荒れ野にひとり 40 日の間とどまり、サタンから誘惑を受けて、それに打ち勝たれました。洗礼と、荒れ野での試練という二つのことを経て、イエスはいよいよ公の活動を開始されます。この流れはマタイ、マルコとも共通なのですが、ルカは独自の書き方をしています。

「4:14 イエスは“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた。その評判が周りの地方一帯に広まった。15 イエスは諸会堂で教え、皆から尊敬を受けられた。」

そして、イエスが育てられた故郷ナザレの安息日の礼拝に出席して、聖書を朗読し、続いて説教をする場面が続きます。イエスはイザヤの巻物を開き、こう朗読しはじめます。

「4:18 『主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、／主がわたしに油を注がれたからである。……』」

このように連続的に「聖霊」、「霊」、「主の霊」が語られているのは、ルカにおいて著しいこ

とです。洗礼において聖霊がイエスに降り、「聖霊に満ちてヨルダン川から帰り」(4:1)、そして「荒れ野の中を“霊”によって引き回され」、「“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた」。そしてナザレの会堂礼拝においては、聖書・イザヤの巻物を朗読しつつ「主の霊がわたしの上におられる」と、ご自身に起こっていることを述べられる。

イエスの歩み、生涯、その働きは、「聖霊」、人間を超えた神の力、神の命によって実現していくのです。

一言だけ、聖書の学問に対してわたしの印象を述べておきます。近・現代の聖書学においては、多くの場合「霊」とか「神の命」などは学問の対象にならない、とされてきました。それで「霊」は度外視され、棚上げにされて、伝えられた言葉、編集された言葉、「言葉」の分析、ということが中心となりました。しかしそれだけでほんとうに聖書の真理が汲み取れるか、むしろ聖書に繰り返し記されている「霊」というものを、「言葉」とともに本気で受けとめるべきではないか、という批判が研究者の中からも起こってきました。それを強く主張されたのは、日本人では旧約学者の関根正雄先生です。『古代イスラエルの思想—旧約の預言者たち』(現在は、講談社学術文庫)という本を、かなり以前のことでありますが、非常な共感をもって読んだ記憶があります。

聖書の中には神の命の息、聖霊の風が吹いているのです。神の霊が、言わば寝ている活字の本を起き上がらせて、わたしたちと出会わせる。そんなふうにして聖書とわたしたちとの関係は生きたものになってきます。

3. イエスの祈りと十二人の選び

イエスの働きは次第に多くの人々に知られるようになり、群衆がイエスを求めて押し寄せるようになっていきました。けれども次のように書かれている箇所があります。

「4:42 朝になると、イエスは人里離れた所へ出て行かれた。群衆はイエスを捜し回ってそのそばまで来ると、自分たちから離れて行かないようにと、しきりに引き止めた。」

「5:15 しかし、イエスのうわさはますます広まったので、大勢の群衆が、教えを聞いたり病気をいやしていただいたりするために、集まって来た。16 だが、イエスは人里離れた所に退いて祈っておられた。」

人々の間での、人々の前での活動と同時に、人から離れて孤独になる、ということがイエスにとっては大切なことでした。一人になって祈るという時間が必要だったのです。神との個人的な交わりが希薄になれば、活動自体も危うくなっていく。これは実は牧師にとっても深刻な問題です。

さて、イエスの人々に対する影響力が増し加わるほど、それに対する反感や怒り、憎しみが一方で増大していきました。イエスの教えや働きは、当時の権威ある人々にとっては極めて不都合なものであったのです。イエスはしばしば、働いてはならないとされる安息日に人を癒されました。治療行為は働くことであり、安息日の掟違反であると非難されたのです。

「6:9 そこで、イエスは言われた。『あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているの

は、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか。』

10 そして、彼ら一同を見回して、その人に、『手を伸ばしなさい』と言われた。言われたようにすると、手は元どおりになった。11 ところが、彼らは怒り狂って、イエスを何とかしようと話し合った。」

このようにしてイエスを抹殺しようとする動きが激しくなってきます。こうした中でイエスは、弟子たちの中にリーダーとなるべき人を任命する必要を感じられました。そこでこう記されています。

「6:12 そのころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈って夜を明かされた。13 朝になると弟子たちを呼び集め、その中から十二人を選んで使徒と名付けられた。」

イエスは決意して祈るために山に行き、徹夜して祈って朝を迎え、そして弟子たちを呼び集めて、その中から十二人を選びました。

祈るとは、神に導きと力を求める、ということです。イエスは、多くの弟子たちの中からもっともふさわしい人を選ぶために神の導きを祈り求められた。そして選ばれる人たちがよりよく成長していくように、イエスの働きを共に担っていけるように、導きと力を祈られたのだと思います。

4. 山の上での変貌

第9章にまた、イエスが祈っておられる場面が出て来ます。

「9:18 イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちは共にいた。」

祈っている人に話しかけたりはしません。それは特別な時だからです。イエスが祈っている。それだけで弟子たちは影響を受けます。祈り終わったイエスは、弟子たちに尋ねました。

「9:18 群衆は、わたしのことを何者だと言っているか」

弟子たちは、洗礼者ヨハネだとか、エリヤだとか、昔の預言者が生き返ったのだとか、世間で言われていることを答えました。イエスは「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と尋ねます。それに対して、ペテロが答えます。「神からのメシアです」。あなたは神から来られた救い主。これはイエスに対する信仰告白です。

これに対してイエスは弟子たちに、ご自分に起ころうとする迫害、受難を告げられました。

「9:22 人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」

それから八日ほどたったとき、イエスはペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて山に登られました。「祈るために山に登られた」(9:28)と記されています。

「祈るために山に登られた」。イエスの決意と覚悟がこめられています。祈って神の導きを受け、祈って神の力をいただきたいのです。同時に、今回連れて行く3人の弟子たちに、神を経験させたいのです。

「9:29 祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。」

山に登る前、祈る前は、迫ってくる迫害に苦しみが深くイエスの顔に刻まれていたかもしれ

ません。けれども祈っているうちに変化が生じて来ます。神から来る平安と喜びと勇気が満ちてくるのです。イエスの内面の変化は、衣服にも反映します。「服は真っ白に輝いた」。

山の上で 3 人の弟子たちは、祈っているイエスの表情の変化を見ました。イエスの顔と衣服の輝きを見ました。

「9:30 見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。31 二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。」

モーセとエリヤ。遠い昔の信仰の指導者が今、イエスと語り合っているのを見ます。3 人の弟子たちは、かつてモーセに託され、エリヤに託された神からの使命が、今、イエスに託されているのを知ります。

「9:32 ペトロと仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると、栄光に輝くイエスと、そばに立っている二人の人が見えた。」

この大事な場面で 3 人の弟子たちはひどく眠かった。マタイにもマルコにもそんなことは書かれておらず、ルカだけがこれを伝えています。ルカは大事な場面における人間の弱さを示しているのでしょうか。それとも、神の神秘の前に人は通常の覚醒状態を保てない、ということなのでしょうか。

その後、弟子たちは雲の中に包まれていきます。そして雲の中からはっきりと声を聞きました。

「9:35 これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け。」

神の声です。迷わずに神の子イエスに聞き従え、と言われる神の声を聞いたのです。気がつくともうモーセもエリヤも姿は見え、イエスだけがおられます。

3 人の弟子たちは、山の上で祈っておられるイエスと、その変化を見ました。神の声を聞きました。彼らは神の子イエスを新しく決定的に認識し、この方を信じて従って行く決意を新たにしましたのです。

5. 神への賛美

イエスは十二人を選んで訓練し、宣教に遣わされた後、やがて新たに七十二人を任命して働きに派遣されました。七十二人は働きを終えて喜んで帰って来て報告します。

「10:17 主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」

その後こう記されています。

「10:21 そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。『天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。』」

ここにイエスご自身の祈りが記されています。イエスご自身の祈りが記された箇所は多くはないので、それだけに貴重です。イエスの喜びのほとぼしりの祈り。神への感謝と賛美です。一番大切なことを神は幼子のような者に示された。学者、知識豊富な者には隠されている尊い真理を、神は素朴な人たちに示された。ただひたすら神を求め、イエスに頼ってきた人たちに

神さまの救いの働きが現れたことに感動して、イエスは賛美の祈りをされたのでしょう。

たぶんそういう意味を汲んで、新共同訳は「幼子のような者」と訳したのだと思います。が、原文は「ネーピオス」、端的に「幼子」です。イエスは文字通り幼子の中に働く神とその愛を経験して、感動の賛美を神にささげられたのかもしれませんが。わたしも幼稚園で子どもたちと接しているうちに、そういうことを経験することがあります。

6. 主の祈り

「11:1 イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、『主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください』と言った。

2 そこで、イエスは言われた。『祈るときには、こう言いなさい。“父よ、御名が^{みな}崇められま^{あが}すように。御国が^{みくに}来ますように。……”』」

これは教会で繰り返し用いている「主の祈り」の根拠となっている箇所です。マタイ 6:9 以下にもあって、教会で用いる主の祈りはどちらかと言うとマタイのほうなのですが、このルカの箇所です。大事にしたいのは、一人の弟子の勇氣ある質問です。イエスの愛と働きの力の源泉は祈りにあると彼は感じていたのでしょう。しかし自分には祈りが乏しく、祈ることに自信がない。祈る言葉を、また祈ることそのものをイエスに学ぼうと願って、彼は「教えてください」と言ったのです。「祈りを教えてください」と訳されていますが、原文は「祈ること（そのもの）を教えてください」というニュアンスです。

今日は主の祈りの解説をする余裕はありませんが、このとき教えられた祈りは、主イエスご自身が祈っておられた祈りにちがいません。主の祈りを祈るとき、わたしたちはイエスご自身の祈りに招き入れられて、イエスと一緒に祈るのです。これは力強いことです。

聖公会には「洗礼志願式」という式があります。洗礼に先立って行なう、言わば入門の儀式です。その洗礼志願式では、志願者は司祭から主の祈りを一言一言口移しのようにしていただく、という場面があります。

ここで一挙にイエスの生涯の終わりへと進むことにします。

7. 主の晩餐とオリーブ山

弟子たちがイエスと共に心と声を揃えて唱えた最後の祈りは、主の晩餐、いわゆる最後の晩餐のときだったでしょう。そのときおそらく、一同で主の祈りが祈られたことでしょう。イエスはパンを取って感謝の祈りを捧げ、またぶどう酒を満たした杯を取って感謝の祈りを捧げて、弟子たちに分け与えられました。これを記念して日曜ごとに教会で行ない続けているのが聖餐式（ミサ）という礼拝です。

その最後の食卓の席で、イエスはペテロにこう言われました。

「22:31 『シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。32 しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。』」

まなもくイエスはご自分が捕らえられること、そしてシモン・ペテロが自分のことを知らないと言うであろうことを予見しておられました。ペテロは絶望して信仰を失い、あるいは自ら死ぬかもしれないほどの危機を迎えることを、イエスは知っておられました。イエスはこれまでずっとペテロのためにも、他のすべての弟子たちのためにも祈ってこられたはずですが、しかし最も危険なのは弟子たちの筆頭ペテロです。それで敢えてイエスはこれを口にして言われました。「わたしがあなたのために祈った」とはっきり代名詞が二つギリシア語原典には書かれています。さらに詳しく見れば、新共同訳は「信仰が無くならないように」と訳されていますが、原文は「あなたの信仰がなくならないように」と、「あなたの」という言葉が書かれています。あなたの信仰がなくならないように、あなたのためにわたしが祈った。

この後、ペテロは予告されたとおりにイエスを知らないと言い、決定的な挫折を経験するのですが、そのペテロをイエスのこの祈りが支えていました。そして、イエスの祈りがやがて彼を立ち直らせる時が来ます。そうして彼は兄弟たちを力づけることになるのです。

食事の後、イエスは弟子たちを連れてオリーブ山に登り、いつもの祈りの場所に来て祈られました。弟子たちにも祈るようにと言われました。

「22:41 そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこう祈られた。42 『父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。』」[43 すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。44 イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の^{したた}滴るように地面に落ちた。]」
イエスはここで命がけで祈り、そして十字架の死を受け入れる決意をされました。

8. 十字架上での祈り

イエスは不当な裁判により死刑の判決を受け、十字架につけられます。

「23:32 ほかに、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。

33 『されこうべ』と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。34 [そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」] ……」

これがルカ福音書に記された十字架上での第1の祈りです。

イエスと一緒に十字架にかけられた一人がイエスに言います。

「23:42 そして、『イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください』と言った。43 するとイエスは、『はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる』と言われた。」

カール・バルトというわたしの敬愛する神学者が、たしかこんなことを言っているのを讀んだ記憶があります。「ここに最初の教会がある。イエスと共に死に、イエスと共に楽園にいることを約束された者たちの教会が」

この礼拝堂の正面中央の上をご覧ください。柱と梁の組み合わさったところが十字架に見

えます。その右にも左にも十字架があります。中央がイエスで、左右が一緒に十字架につけられた犯罪人です。そのように見えないでしょうか。イエスは左右の人としっかり手をつないでいます。左右の人とは、実はわたしのことかもしれません。たとえ人が、わたしたちがイエスの手を放そうと、イエスはわたしたちの手を放されないのです。

ペテロに対して「あなたの信仰が無くならないようにあなたのためにわたしが祈った」と言われたイエスは、わたしの信仰のためにも祈ってくださる。

イエスの十字架上での第2の祈りを聞きましょう。

「23:44 既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。45 太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。46 イエスは大声で叫ばれた。『父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。』 こう言って息を引き取られた。」

9. 昇天のイエスの祝福

十字架に死なれたイエスは三日目に復活されます。ルカ福音書の復活の記事の中に、わたしの生涯をある意味で決定づけた言葉があります。十字架の死の金曜日から三日目の日曜日、エルサレムからエマオの村に向かう二人の弟子の物語があります。二人に追いついてきて道連れになった人が、二人の話聞き、やがてその人が聖書の話をしてくれます。夕暮れにエマオに到着。二人は家にその人に強いて招き入れ、夕食の席に着きます。その人はパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて渡してくれた。そのとき、二人の目が開けて、それがイエスだとわかった。ふたりはこう言います。

「24:32 二人は、『道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか』と語り合った。」

これはわたしの学生時代の回心を引き起こした物語なのですが、今はそれ以上は語れません。

ルカ福音書の最後はイエスの昇天です。イエスは再び弟子たちをオリーブ山に連れて行きます。

「24:50 イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。 51 そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。 52 彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、53 絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。」

イエスは弟子たちを手（両手）を上げて祝福し、祝福しながら見えなくなりました。弟子たちのまぶたと胸には、祝福し続けてくださるイエスの手が、イエスの愛が刻印されました。このイエスの祝福の祈りに励まされ支えられて、弟子たちは生きていくことができます。

イエスはわたしたちのために祈り、わたしたちと共に祈りつつ、同時にわたしたちの祈りを聞いてくださる方（礼拝の対象）です。イエスは、ルカ福音書の最後に描かれているとおりに、わたしたちを祝福し続けていてくださいます。